

《巻頭言》

科学分析支援センターの設立 30 周年にして初めて・・・

理工学研究科長 山口 宏樹

埼玉大学総合研究機構の下にある科学分析支援センターが、昭和 55 年に分析センターとして設立されて以来、30 年を迎えられたとのこと、誠にご同慶の至りです。

私ごとで恐縮ですが、大学教員としてのキャリアをスタートさせたのが昭和 55 年、埼玉大学には昭和 56 年 11 月に着任しています。ほぼ同時期に埼玉大学において、センターと一緒に歩んできたこととなりますが、私の研究分野もあって、これまでは全くと言っていいほど縁がありませんでした。これを機に、ホームページでいろいろと勉強して、初めて知ったことがほとんどです。科学分析支援センターの英語名称が Molecular Analysis & Life Science Center^{※編者注}であることも改めて知り、とても新鮮に感じた次第です。その機関誌である MaLS FORUM の巻頭言を Vol.1 から Vol.7 (最新号)までずっと拾い読みしてみますと、科学分析支援センターの歴史は年々老朽化する機器のメンテと更新への努力、経費削減を含めた運営の合理化のように見えます。どこの大学でも同じ問題を抱えているとの苦勞が淡々と述べられていました。設備概算要求や補正予算による手当、教育研究高度化支援経費の適用などで、この 2 年は多少なりとも問題の解決が図られたように思いますが、今後も、全学的な設備マスタープランに基づいて、粛々と充実を図っていく他はなさそうです。

理工学研究科は平成 18 年 4 月に重点化を果たし、それまで理学部と工学部に属していた教員を研究部に集約しましたが、科学分析支援センターとは切っても切れない関係にあります。センター長は理工学研究科教授が兼務し、スタッフの教員もすべて理工学研究科を母体としています。また、分析機器測定指導者には理工学研究科物質科学部門、生命科学部門等の教員が数多くその名前を連ねています。それ以上に、センターの主要ユーザーは理工学研究科の教員や学生です。センターは組織として独立した存在であるものの、理工学研究科としては、これまで以上に連携を強めて科学分析支援センターの運営・充実をバックアップしていきたく考えます。

研究の成果は用いる機器等の良し悪しに大きく依存することが多いかと思えます。一方で、そこそこの機器を用い、その性能の足りない部分は知恵で補って同等以上の成果を出す、そのほうが問題の本質を掴め、問題解決能力を備えた人材の育成に一層寄与する場合があることも事実ではないでしょうか。機器の性能によりできることできないことの差、研究の効率の差は歴然ですが・・・このような観点からも科学分析支援センターの苦惱が見え隠れしますが、埼玉大学で所有している機器の能力を最大限に活用して、最大限の研究成果につなげようとするセンターのこれまでの努力と意欲に改めて敬意を表します。

※ 平成 22 年 4 月 1 日より科学分析支援センターの英語名称は「Comprehensive Analysis Center for Science, Saitama University」に変更されております。